

## タックシン -- 亡命指導者によるリモートガバナンス (特集 亡命する政治指導者たち)

著者	相沢 伸広
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	209
ページ	9-12
発行年	2013-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00003771">http://hdl.handle.net/2344/00003771</a>

# タックシン ——亡命指導者によるリモートガバナンス——

相沢 伸広

## ●はじめに

二〇〇六年九月一九日、タイのタックシン首相はクーデタにより失脚し、亡命生活を開始した。それから六年半、タイでは五人の首相が入れ替わったものの、依然としてタックシンこそが、もともと

その動静が注目される政治家であり続けている。現在のインラック政権についても、重要政治案件において実質的な決定を下しているのはタックシンであると与党幹部も認めている。クーデタによって首相の座を追われ、国外にありながら、本国においてその政治力がかように維持できている亡命指導者は、世界広しといえども他に例がないだろう。タックシンは、リモートガバナンスとでもいうべき新しい政治スタイルを体現している。

タイにおいて同様にクーデタによって政権の座を追われ、亡命先

で比較的静かな余生を送ったピブンやプリディ、さらにいえばラーマ七世王と比べてもその違いは際立っている。ではなぜ、タックシンはかように国外にあつて権力を維持できているのか。

## ●二〇〇六年クーデタ

二〇〇六年九月一九日夜、タックシン首相が国連総会に出席するためニューヨークに滞在している間、ソンテイ陸軍司令官率いる「民主改革評議会」がクーデタを取行、主要施設を占拠した。その後、速やかに国王への拜謁を認められ、政権奪取が承認された。この結果、タックシンは首相の座を失った。

二〇〇一年総選挙で自らが率いるタイラックタイ党の勝利を通じて首相となったタックシンは、二〇〇五年に四年間の任期を満了し、それに続く総選挙において勝利した。三〇パーツ医療政策などが広

く国民に支持され、とりわけ議席数の多いタイの東北部、そして出身地域でもある北部において経済下層から絶大な支持を得て、歴代首相にはない画期的な広い支持基盤を確立していた。タイの歴代首相で四年間の任期を満了したのも首相として再選されたのも憲政史上初めてであった。

他方、こうした地方・下層の支持を集める政策、また強権的な政治スタイル、一族の汚職などが、バンコクの中流層や知識人、伝統的な既得権益層の強い反発を招き、大規模な反タックシンデモが二〇〇五年以降頻発していた。憲法裁判が、タイラックタイ党による買収工作等の選挙違反を理由に二〇〇五年選挙結果が無効であるとすする裁定をくだし、二〇〇六年三月にはやり直し選挙が実施された。

やり直し選挙においても、タック

クシン派による買収工作などが露見したこともあり、タックシンへの批判はますます強まった。選挙をやれば、タックシンが勝つ。ただ選挙は不正だらけで司法がそれを無効化するという政局は手詰まりを迎えており、タックシンを追い落とす最後の手段として、クーデタも時間の問題と捉えられていた。そのようななかでのクーデタ成功であった（参考文献①）。

## ●第一次亡命生活

暫定政権の首相となったスラユット元陸軍司令官が、一年後の選挙そして民政移管までタックシン氏に帰国しないよう発言していたように、タックシンは亡命生活を開始した。彼はまず娘が留学しているロンドンに移り、三、四か月間はそこを拠点にした。ロンドンには所有する豪邸、家族、そして近しい友人もあり、家族との時間、そしてビジネスを行うには最適であった。その後タイ人に帰化した元中国人の友人、严彬（タイ名 Chanchai Ruayroongruang）の招きをうけて、彼はその活動拠点を北京に移した。各国を飛び回りながらも、五・六カ月の間、北京滞在時はタイ人のビジネスパートナーらとゴルフ生活を満喫した（参考文献②）。

亡命生活中も、タックシンの姿は常にメディアで報じられていた。なかでも、もっとも大きな話題となったのは亡命生活中の二〇〇七年六月、イングランド・プレミアリーグのサッカーチーム、マンチェスターシティを彼が買収したニュースであった。当時プレミアリーグの地位を低迷していたクラブを八一五〇万ポンドで買収し（二〇〇八年八月、アブダビのSheikh Mansourに売却）、タイ国内の資産が凍結されてもなお、潤沢な資金を有していることを示した。この買収劇の何より重要な点は、プレミアリーグのサッカー放映はタイ男性の間でもっとも人気のあるテレビ放映コンテンツであり、したがって、スポーツニュースを通じた「タックシン」の宣伝効果が抜群だということである。首相の座を失い、たとえ新聞紙面の政治欄から追い出されても、スポーツ欄の新たな顔としてタックシンは再びメディアの注目を集めることに成功していた。

タックシンが国外にいる間に、クーデタに成功した暫定軍事政権、つまり反タックシン派が腐心したことは、タックシンの政治生命を絶つことであった。そのため三つの方法が試みられた。第一に、強い首相の権限を規定した一

九九七年憲法を改正することである。タックシン亡命中の二〇〇七年に制定した新たな憲法では、司法の権限を強化し、首相権限を縮小した。第二に、タックシンの政治的基盤である政党、つまりタイラックタイ党を解党することである。これも、タックシンが不在の間、二〇〇七年五月に憲法裁判所が解党判決を出し、さらにタックシンを含めた党幹部一一一人の五年間の公民権停止を決定した。第三に、タックシンの政治基盤を支えるカネの力、すなわち個人資産を接収することである。二〇〇七年六月に資産調査委員会はタックシン一族のタイ国内にある資産約七六〇億バーツを凍結した。こうして暫定政権は矢継ぎ早にタックシン派の政治生命を絶ちにかかった。

### ●タックシン派の復権と一時帰国

反タックシン派のあらゆる努力も空しく、二〇〇七年一二月に行われた総選挙では「タックシンを帰国させる」ことを最大の選挙公約として選挙戦に臨んだ、タックシン派が勝利した。解党処分にあったタイラックタイ党の後継政党である人民の力党が第一党となり、タックシンが指名したサマツ

ク党首が首相に就いた。このことは亡命中のタックシンの命運に大きな意味をもたらした。亡命中であつても、汚職の嫌疑で訴追されても、タックシンに対する人気は衰えていないこと、そして、政治のゲームのルールが選挙である限り、タックシンは権力を握ることができるということが証明されたのである。サマツク内閣にはタックシンの盟友が顔をそろえ、その顔ぶれをみれば、実際の勝者が誰であるのかは明らかであった。この総選挙を通じて、タイの政治家たちはタックシン・ブランドの強さを再確認したのであった。

親タックシン政権が誕生した後、タックシンは二〇〇八年二月二八日、約一年半ぶりにタイに帰国した。この帰国の最大の目的は、反タックシン政権下で訴追された汚職裁判において身の潔白を勝ち取ることであった。しかし、ポチャマン夫人の土地取引違反裁判の一审で有罪判決が下されると、タックシンは選挙に勝利してもその権力が司法に及ばないことを悟った。反タックシン派のもとで制定された新憲法下では、首相の司法への介入が厳しく制限されており、たとえ選挙で勝利しても、タックシンは自身の汚職裁判を意のままに進めることはできなかった。

### ●第二次亡命 ―ドバイでの生活―

タックシンは七月二〇日に日本、中国を訪れるため一旦出国した。最終的には八月八日の北京五輪開会式に参加した後、八月一日にタイに帰国し、国有地取得をめぐる汚職疑惑の裁判で一日にタイ最高裁判所に出廷する予定だった。ところが、「タイでは公正な裁判が受けられず、自身と家族が危害を加えられる恐れがあるため」バンコクでの裁判を欠席し、北京から直接イギリスに向かった。そして、「民主主義を何より重んじる」イギリスへの亡命を申請する意向を述べた。公判を欠席したことで、最高裁はタックシンに逮捕状を発行し、その後一〇月二日には被告不在のまま禁固二年の有罪判決が確定した。これ以降、タックシンはタイに帰国すれば即取監される状態となり、以後現在に至るまで帰国を避けている。

タイにおける有罪判決が確定したことで、居住先のイギリスは、翌一月にタックシン夫妻が北京に向けて出国した際、夫妻の入国ビザをその後認めない決定を明らかにしたため、タックシンは新たな亡命先を求めることとなった。イギリスはタイとの間で犯罪人引渡し協定を締結しており、引渡し

を巡る政治的判断を回避するため  
の処遇であったとされる。

第一次亡命期の一年間で、彼は  
ロンドン、北京を拠点に数々の国  
を回ったが、そのなかでもドバイ  
は気に入っていた(参考文献②)。  
ドバイはなによりも航空交通の便  
もよく(バンコクとは直行便で七  
時間前後)、金融機関も集まり、  
英語も通じることから、経済活動  
を行ううえでもきわめて簡便であ  
る。ドバイ、UAEはタイと犯罪  
人引渡し条約を締結しておらず、  
タイ本国への強制召還を心配する  
ことがないという点もプラスに働  
いたであろう。サウジアラビアと  
異なり、ドバイであれば海外メ  
ディアに出演し、政治活動を続け  
ることに強い制限もない。ドバイ  
および湾岸諸国の盟主サウジアラ  
ビアなどにもタックシンは数多く  
の友人を持ち、また経済アドバイ  
ザーとしても中東湾岸諸国のみな  
らず、ドバイからそう遠くないア  
フリカ各国からも彼は歓迎されて  
いる。こうした様々な条件が重  
なつて、タックシンにとってドバ  
イは「住みやすい」ところと判断  
された。(参考文献②)

二〇〇八年一二月、憲法裁判所  
が再びタックシンの支持政党(人  
民の力党)を公選挙法違反のかど  
で解党処分になると、かつてタイ

ラックタイ党におけるタックシン  
の右腕として活躍していたネウイ  
ンの派閥議員が寝返り、反タック  
シン派の民主党と組んで連立政権  
を樹立した。この結果、タックシ  
ン派は再び政権を失った。新たに  
誕生したアピシット政権は再び  
タックシンの政治力を押さえ込め  
ようと、外交旅券、一般旅券を剥奪  
し、最高裁も四六三億七〇〇〇  
バーツ(約一四〇〇億円)にのぼ  
るタックシンの資産接収を決定す  
るなど、再び攻撃の手を強めた。

ドバイの生活を支えているのは  
何よりもその潤沢な富と、ドバイ  
の首長、そしてサウジアラビアの  
国王の庇護である。反タックシン  
派はタックシンを反王室的存在と  
してしばしば糾弾してきたが、  
こと亡命生活についていえば、皮  
肉にも各国の国王のネットワーク  
に強く支えられているのが実情で  
ある。中東の国王のみならず、ブ  
ルネイの国王もまた、タックシン  
の亡命生活を支えている重要な人  
物の一人である。カンボジアのフ  
ンセン首相をはじめとして各国指  
導者との個人的な関係を礎に、世  
界を飛び回っている。

タイのパスポートを失ったタック  
シンは、その後、主としてモン  
テネグロのパスポートで移動する  
ことになった(参考文献②)。モ

ンテネグロは、五〇万ユーロ以上  
の投資をした者には、第二市民権、  
および第二旅券を支給する法令を  
二〇〇八年に制定しており、その  
額をはるかに超える投資を行った  
タックシンは旅券を受け取る権利  
を有していた(参考文献③)。さ  
らに、タックシンはニカラグアへ  
の投資戦略に対するアドバイザー  
的役割を担ったこともあり、ニカ  
ラグアのダニエル・オルテガ大統  
領より二〇〇九年、特別市民権と  
外交旅券を与えられた(参考文献  
④)。ほかにも、バミューダ、トー  
ゴ、チャド、バハマ、中央アフリ  
カ等の各国が彼のビジネスマンと  
しての才覚、そしてその富に魅力  
を感じ、亡命先としてタックシン  
を歓迎する意を示した(参考文献  
④)。

反タックシン派の民主党が政権  
を握っている間、タックシンは各  
国における活発なビジネス展開で  
得られた富と、各国指導者の支持、  
そしてなにより、タイ国内の根強  
い支持層の三者を背景に政治活動  
を継続することが可能となった。  
タイでタックシン派の政治集会が  
開催されれば、直接テレビ電話や  
インターネット回線を通じて会場  
に設置されたスクリーンに登場  
し、集まった支持者に呼びかけ、  
自身の存在をアピールするととも

にタックシン支援者の政治活動を  
繰り返し鼓舞した。集会のハイラ  
イトは決まって海外から「私のこ  
とを待っていてください」「みなさ  
んの苦しみはよくわかります」と  
呼びかけるタックシンの「天の声」  
ならぬ「海外からの声」であった。  
集会でのスピーチは録画され、そ  
の後YouTubeやFacebookで拡  
散され、東北部や北部にいる支持  
者にまでタックシンの声は届いた。

亡命中にあつて、国内外の支持  
と現代メディアを駆使したタック  
シンの政治活動は、二〇一一年七  
月に行われた総選挙の勝利に結実  
した。タックシン派の政党である  
プアタイ党の選挙の顔として実妹  
インラックを指名し、単独過半数  
を占める圧倒的な勝利を取めたの  
である。タックシン派政党から離  
脱した議員の選挙結果は散々であ  
り、再び選挙におけるタックシン・  
ブランドの強さをみせつけた。  
タックシン派の勝利が確定した瞬  
間から、ドバイへ、香港へとさら  
に大量のタックシン詣でが加速し  
たことに象徴されるように、政策  
決定や閣僚人事など、タックシン  
の承認なしに重要政治事項が決ま  
らないのは公然の秘密である。政  
治家も軍人もタックシンに会った  
のか否かが、常にメディアで  
ニュースとなる。亡命中の二度の

にタックシン支援者の政治活動を  
繰り返し鼓舞した。集会のハイラ  
イトは決まって海外から「私のこ  
とを待っていてください」「みなさ  
んの苦しみはよくわかります」と  
呼びかけるタックシンの「天の声」  
ならぬ「海外からの声」であった。  
集会でのスピーチは録画され、そ  
の後YouTubeやFacebookで拡  
散され、東北部や北部にいる支持  
者にまでタックシンの声は届いた。

選挙を経て、タックシンはキングメーカーにとどまらない、実質的な政策運営を行う力を保持し続けることに成功している。タックシンは、ドバイや香港、北京から八台もの携帯電話を駆使し、家族、党員、ビジネスマンらに指示をとばしてタイの政治を動かす、そんなりモートガバナンスを体現する極めて稀な亡命指導者となった。

## ●おわりに

この六年間をみてみれば、タックシンが亡命中にありながら、その政治力を維持できた主な理由として、少なくとも、①国内の政治基盤、②潤沢な資金、③広範な海外指導者達の支持の三点は挙げられるだろう。

第一の国内の政治基盤は彼が政権を担当していた時代の政策の賜物である。タックシンの汚職、強権的政治手法は否定しようもないが、弱者の味方として自身を喧伝できるだけの政策を実行したのもまた確かであった。選挙を通じた権力獲得が圧倒的な正当性をもつ現代の政治環境において、選挙時における広範かつ根強い支持層を確立していたことは、亡命してなおその人気を維持するのに決定的であった。

第二に、自由に使える潤沢な資

金の存在である。独立した資金力のない状態で政治活動を行う為には、当然パトロンの探す必要がある。亡命政権等は一般的にこの課題に直面する。パトロンの頼れば、多くの場合その意向を汲んだ政治活動を行う必要が生まれるため、政治的自由は必然的に制限されることになる。しかしタックシンは、自身の豊富な資金力ゆえに、彼自身の運命を制約しかねないパトロン（例えば米国、イギリス、もしくはタイ国内の大企業家）に頼る必要がなかった。イギリスが反タックシン派政権との関係を重視して、タックシンを追放しても、イギリスがパトロンだった訳ではないため、自分自身の政治的運命を左右されることはなかった。こうした「自由」を維持する為にも、個人がビジネスで蓄えた豊富な流動資産の存在は、極めて重要であった。

第三に、各国指導者の支持である。これは、タックシンが権力喪失過程で国際的にみて派手な虐殺行為をしたわけでもなく、周辺国の安全保障体制を揺るがすような内戦状態を生み出したわけでもなかったことが幸いした。それがゆえに、世界各国にいるタックシンの「友人」たちは、彼を荷の重い厄介者扱いにする必要もなく、経

済アドバイザーのような形で歓迎することができたのである。企業家としての彼の能力もまた、各国指導者が好意的に評価したポイントである。こうして彼を歓迎する海外の指導者が多ければこそ、国際的に彼の在任中の罪に対する追求が強まることはなく、亡命すれども政治的には生き延びえたといえるだろう。

今後の焦点のひとつは、やはり果たしてタックシンはタイの地に返ることができようかであろう。これはタイの歴代亡命政治指導者が叶えられなかった夢である。翻って考えれば、かように政治の決定権を維持しながら、それでもなお帰国できないのは却って不思議かもしれない。その理由があるとするれば、現時点では司法府が行政府をいつでも攻撃しうる絶大な権限をもち、実妹が首相を務めていたとしても、帰国するや否やタックシンは収監されるからであるろう。選挙を行えばその度にタックシン派が勝ち、行政府を握るものの、司法府が反タックシン派に占められていることで、自らが収監を逃れることはつきない、という現在のような均衡状態を脱するには、憲法改正を通じて司法権限を削ぐしかない。しかし、反タックシン派は健在であり、憲法

改正に反対する意見も多く、二〇一三年一月時点でその動きは頓挫している。ゆえにタックシンは、今後まだ外国での亡命生活を続けながらりモートガバナンスを続けるのか、それともこのまま政治キャリアを終えるのか、こちらも未だ判らないままである。いつまで続くともわからないタックシンの亡命生活も、いまはただ、憲法改正の動きを待つばかりである。

(なお、本稿の執筆にあたっては、二〇一二／一三年度京都大学東南アジア研究所共同利用・共同研究拠点「東南アジア研究の国際共同研究拠点」の支援を頂いた) (あいざわ のぶひろ／アジア経済研究所 法・制度研究グループ) 《参考文献》

①Phongpaichit, P., & Baker, C. J. 2009. *Thaksin*. Chiang Mai: Silkworm Books.

②Plate, T. 2011. *Conversations with Thaksin*. Singapore: Marshall Cavendish Editions.

③Montenegro, G. o. 2008. *MONTENEGRO IN CITIZENSHIP ACT*. Montenegro: Retrieved from <http://www.gov.me/files/1207920355.doc>.

④Matichon, November 03, 2008.